

【一般口演2】 第4席

馬王堆出土脈書について

宮城 松木 きか

1973年、長沙の馬王堆第三号漢墓から多量の帛書・竹木簡が発見された。そのうち帛書五件と竹木簡の内容は医書であった。それらの分析が進み、医史学研究は中国伝統医学の祖型を『黄帝内経』に求めている段階から、それ以前の医学の在り方をも視野に入れるべき広さを求められるものとなった。

馬王堆医帛には「足臂十一脈灸経」「陰陽十一脈灸経」「陰陽脈死候」「脈法」と名付けられた四書の脈書と、「五十二病方」と名付けられた方書がある。いずれも緻密な考証のもと翻字・加注され、その成果は『馬王堆漢墓帛書（肆）』（1985年、文物出版社刊）へと結実し、さらに同書に対しさまざまな考証が加えられている（成都出版社刊『馬王堆漢墓医書校釈』など）。

うち「足腎十一脈灸経」「陰陽十一脈灸経」は、脈ごとに、その走行を示し、続いてその脈の所謂主治病証を示している。その脈が『靈枢』経脈篇の雛型であるという指摘はつとになされ（李鼎「従馬王堆墓医書看早期的経絡学説」、1978年、「浙江中医学院学报」）定説となっている。二つの「脈灸経」と「陰陽脈死候」「脈法」との関連は山田慶児「馬王堆医書三則」（『新發現中国科学史資料の研究』）によってすでに指摘されている。

以上のように馬王堆漢墓出土医帛については、検討され尽くし、評価が定まったかに見えるが、その認識は正しいのだろうか。本発表は、これまでの研究成果と大きく異なるものではないが、経脈走行部分については、それが直ちに経脈篇に結びつくものではないことを検討し直し、主治病証部分については、脈書以外の医書を交えて病の体系をさぐる。そしてさらに、それらの両者から立ち現われてくる『黄帝内経』を支えていたふるい医術について、その立体像を示そうと試みる。